

# 大学院獣医生命科学研究科

## 令和 7(2025)年度 第 1 次入学試験

### 獣医学専攻 博士課程

### 専 門 科 目

### 獣 医 内 科 学

「解答例」

心筋症は肥大型心筋症 (HCM)、拘束型心筋症(RCM)、拡張型心筋症(DCM)、不整脈原性右室心筋症(ARVC)および分類不能型心筋症(UCM)に分類される。また猫に特有の病型として過剰調節帯型心筋症がかつては記載されていたが、現在、これは RCM の一種であるという指摘が受け入れられるようになった。

HCM は動物では特に猫での発生が多く、左室壁の異常な肥大とそれによる拡張不全が特徴である。心拍出量の低下による失神や運動不耐性に加え、左房拡大に伴い肺水腫や動脈血栓塞栓症 (ATE) が認められる。左房の収縮性を改善するためにピモベンダンのような強心薬、肺水腫に対してはフロセミドのような利尿薬、ATE に対してはヘパリンやアスピリンが選択されることが多い。

RCM も動物では猫での発生が多い。RCM の病態も HCM のそれと同様、拡張不全が主軸となる。これは心内膜の高度な増殖によって生じるが、心室壁の肥大は認められない。病態生理、臨床徴候および治療方針は HCM のそれらに準ずるが、RCM の症例の生命予後は HCM のそれよりも悪い。

DCM は心室壁の菲薄化および線維化を特徴とし、主に収縮不全を主徴とする。かつては、猫ではタウリン欠乏症により DCM が発生したが、キャット・フードにタウリンが添加されて以降、DCM の発生は激減した。これに対して、犬で最も多発している心筋症がこの DCM である。心室の収縮不全により心拍出量が低下する。病態が進行し拡張不全が合併すると、うっ血性心不全に陥る。治療では強心薬、血管拡張薬、そして必要に応じて利尿薬が用いられる。

ARVC は右室を起源とする頻脈性不整脈、そして右室壁の菲薄化を特徴する心疾患である。動物では報告例が非常に少なく、また診断されてからの生存期間が非常に短いため詳細は不明である。

UCM は上記の病態を複数兼ね備えた心臓病である。動物では UCM の報告例は非常に少なく詳細は不明である。病態に応じて強心薬、血管拡張薬、抗不整脈薬、利尿薬が使用されることが考えられる。

【出典】

・ 獣医内科学（第3版），一社・日本獣医内科学アカデミー編，文永堂(2022).

・ ネコの肥大型心筋症 診断・管理の理論と実際（第2版），竹村直行著，ファームプレス